

インサイト

グローバリゼーションに翻弄されて ーグローバリゼーション、格差、そしてポピュリズムのダイナミクス

浅沼信爾
一橋大学客員教授

アメリカ大統領選挙でトランプが勝利を収めたのは、驚きであると同時にわたくしにとっては殆ど理解不能の出来事だ。その前には BREXIT があった。いったい世界で何が起きているのだろうか。現実には起きている事を、「理解不能として理解する」のは嫌なので、自分なりに理解しようと努め、それをまとめてみた。

『グローバリゼーションの終焉』

すべては、グローバリゼーションから始まった。ところで、過去四半世紀は今次グローバリゼーションが最高潮に達した時期だと考えられるが、その真下の 2001 年にハロルド・ジェームスという経済歴史家は、『グローバリゼーションの終焉』というショッキングなタイトルの本を書いた。¹ この本の副題（「大不況からの教訓」）から明らかなように、ここで描かれたグローバリゼーションは、1880 年代から第一次世界大戦（1914 年）までのいわば第一次グローバリゼーションで、それがなぜもろくも崩れ去って、結果として世界大恐慌（1929～）を招来したかを分析している。

資本主義が生み出すグローバリゼーションは、実に強い経済的な拡張運動だ。まず、モノが動き出す。それからカネが。同時にヒトが動く。産業革命以来成長と進化を続ける世界経済は、技術進歩と技術進歩の世界的な拡散に支えられてきた。人々が第一次グローバリゼーションと呼ぶグローバリゼーションの拡大と深化は、19 世紀末に始まり 1920 年代にピークに達した。しかし、良く知られているように、第一次グローバリゼーションは、1920 年代末に始まった世界経済—特にヨーロッパ経済—の混乱と停滞に続く世界大恐慌で幕を閉じた。

何が起こったのか。何が原因だったのか。ジェームスは、グローバリゼーションを終わらせたばかりでなく、退行させたのは、国際金融危機、保護貿易主義、国際的な移民に対する反対、そしてポピュリスト政治の四つの要因だと考える。グローバリゼーションは、世界経済の成長を加速させるが、その過程で不動産や金融・資本市場でバブルを生みやすい。そしてそれらバブルが弾けると、バブルを支えてきた金融市場が破綻する。それはともすると経済に不況をもたらす。グローバリゼーションは、すべての成長がそうであるように、世界経済の構造に変化をもたらす。それに従って国内的にも国際的にもウイナーズとルーザーズ（勝者と敗者）のグループが生まれる。世界経済が成長を続

¹ Harold James, *The End of Globalization: Lessons from the Great Depression*, 2001, Cambridge MA: Harvard University Press.

けている間は、何とか調和と均衡を保っていた政治経済社会を、ルーザーズ・グループの不満が分断する。不満グループは、一国内の特定地域の場合もあれば、階級闘争を標榜する場合もある。あるいはまた、経済成長にひきつけられて流入した移民グループに対する反発もある。

経済と社会に対する不満と怒りが国民の大きな部分を占める貧困層と中産階級に広がると、彼らのアングスト（怒り、不安、焦燥感、苦悩、恐怖がすべてミックスしたもの）を人気と得票に転換させるポピュリスト政治家が現れる。扇動政治家による人気取りと権力掌握を目的としたポピュリスト政治の始まりだ。ヒトラーもムッソリーニも、またペロンも、そのようにして世界の政治の舞台に現れたのだ。国民の不満を掬い上げる形での政策は、「自国さえ良ければよい、自分のグループの利益が第一だ」というグループ・エゴ中心主義で、コストに関わりなく自国産業を守ろうとか、国民の雇用を守るために移民を排斥しようとかを標榜した保護貿易政策や移民政策になって現れる。

このような政策の最大の問題は、それらの政策や制度が他の国々からの反作用を引き起こすことを想定していないことだ。また、想定していたとしても、無視するかあるいは軽視する。緻密な計算にもとづいた成算の無い政策だ。要するに反知性主義的な、感情と情念の政治と政策に墮落してゆく。このような保護主義的な政策と制度の作用・反作用が、結局は1920-30年代の国際貿易制度や国際通貨制度の崩壊を招いた、というのがジェームスの見立てだ。ジェームスは、さらにその当時—そして今も—進行中の第二次グローバリゼーションに警告を鳴らした。あたかも、2007-08年の国際金融危機とそれに続く世界大不況と、さらにその後続くEU危機、BREXIT、そしてトランプ大統領の出現を予見していたがごとくだった。

グローバリゼーションを飼いならす

では、われわれが今経験しているのは、グローバリゼーションの必然的な帰結なのだろうか？グローバリゼーションの成功はその破壊の芽をうちに秘めていたのは事実にしても、グローバリゼーションの終焉が歴史の必然だという考えは、あまりにも悲観的だ。

グローバリゼーションに限定しないでも、経済の成長と発展は当然のことに国際的・国内的な構造変化を伴う。そして、構造変化はウイナーとルーザーを生み、既存の政策や制度を成長阻害要因に転換する。マルクスを持ち出すまでもなく、「生産力の高まりは、上部構造たる制度や政策との間に矛盾を生じさせる」。それでは、歴史的にはこの矛盾はどのように解決されてきたのか。それは、政策や制度の調整、すなわち政策・制度改革によって社会的な調和が保たれるような努力がされてきたからだ。改革は、既存の経済関係や権利・権益のラジカルな変化なしに、成長と発展に沿って制度や政策を変化させる努力だ。新しい経済勢力や権力を受け入れる一方、既存の勢力や権力を排除しようとはしない。いわば、折り合いをつけるやり方だ。あまりにも既存の勢力や権力が頑なで、新しい流れを受け入れようとしない場合には、最終的には現存する制度や政策を破

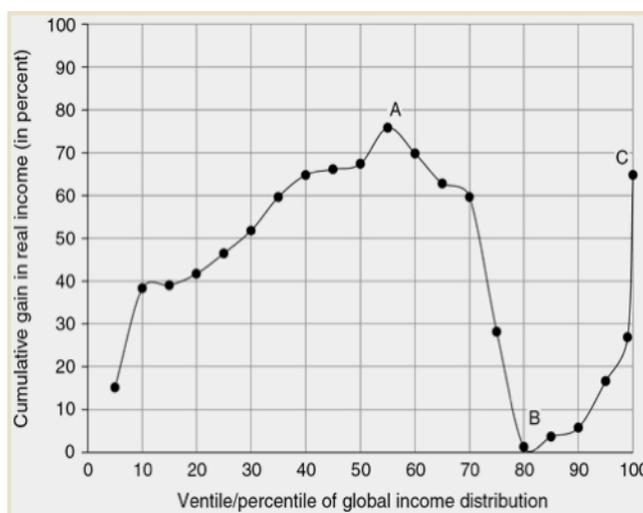
壊すしかなくなる。これが革命だ。革命はあまりにもコストが大きすぎる。フランス革命にしろ、ロシア革命にしろ、そのコストは悲惨なほどに大きかった。だから、経済社会の発展のためには、革命よりは改革がより効率的だと考えられる。

グローバリゼーションは、本来的な矛盾を抱えている。国際的な経済活動にとって、国境の存在は無益かあるいは有害だと考える一方、制度や政策はそれぞれの政府の責任で、その調整や改革は政府の手にならなければならないからだ。この矛盾は、国際協調、特に国際条約や制度によって解決されてきた。IMF や世界銀行、WTO 等々がそれだ。しかし、そのような国際協調が、自己中心的な政府の行動によって不可能であるとする、グローバリゼーションは退行せざるを得ない。

グローバリゼーションと「格差」問題

先にグローバリゼーションは、その結果としての成長と発展の過程で、ウィナーズとルーザーズを生み出すといったが、それが今日世界的トピックになっている格差の問題だ。その格差問題を、グローバリゼーションのコンテキストで最も上手く表現したのは、ブランコ・ミラノヴィッチだろう。彼は、最近出版された『グローバル不平等：グローバリゼーション時代のための新しいアプローチ』という本で、有名になった「象のカーブ」によって今日の格差問題を説明している。²

象のカーブ



Source: Branko Milanovic, *Global Inequality: New Approach for the Age of Globalization* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 2016)

この図の中で、ミラノヴィッチは、x 軸に全世界の人口の一人当たり所得水準を最低レベルから最高の 1% のレベルに並べ、それぞれが 1988 年から 2008 年の 20 年間にどの

² Branko Milanovic, *Global Inequality: A New Approach for the Age of Globalization*, 2016, Cambridge MA: The Belknap Press of Harvard University Press.p.11 and 23.

ように変化したかを y 軸に%で示した。そのようにして描かれる曲線は、ちょうど象が右を向いて鼻を高く上げているようなイメージになる。象の背中の盛り上がった点は、この 20 年間のハイピッチのグローバリゼーションから最も利益を得た中国、インド、インドネシア、タイ、ベトナム等のアジア諸国の人口だ。象の鼻の下がった点は、先進諸国の中産階級の人たちの所得変化で、鼻はほとんど地面にくっつきそうになっている。鼻は x 軸を右に行くと高く上げられ、人口の高所得 1%の人たちの所得変化は、アジアの高度成長国の人たちと同じくらいだ。

この図から読み取れるのは、グローバリゼーションのウィナーズは、アジア諸国等の高度成長国の国民（「象の背中」）とグローバル高所得 1%の金持ちたち（「象の鼻の先」）で、逆にルーザーズは低所得国の国民（「象の尻尾」）と先進国の中産階級（「象の鼻の地面近くまで低くなったところ」）だ。今日の格差で、一番問題なのは、この最後の先進国の中産階級の没落あるいは下層階級への転落なのではなかろうか。最近格差問題を世界的に有名にしたピケッティは、当初得 1%の金持ちを問題にした。³ 彼は、資本主義社会では趨勢的に資本収益率は経済成長率よりも高く、したがって何か特別の理由（例えば、戦争）によって GDP に占める労働のシェアが変わらない限り、資本家と労働者の所得格差は広がってゆくと論じた。そして、解決策としては、累進的な所得税によって、所得の再分配が必要だと結論づけた。

わたくしは、彼の主張は間違いではないにしても、より深刻な中産階級の問題を直視していないと思う。経済成長と発展が展開する過程で、何らかの格差が生じるのは避けがたいことだ。問題は、この格差をどのように認識するかだ。格差が問題になると、常に結果の平等と機会の平等が議論される。社会的正義の観点からは望ましいにしても、世界的な規模での結果の平等は達成不可能だ。それを達成しようと試みた社会主義・共産主義の壮大な実験が何に帰結したかを考えていただきたい。だからこそ多くの国で、格差問題を機会の平等の問題として来たのだ。

ただし、機会の平等は、本当に大多数の人々が平等な機会を与えられていると実感できるものでなければならない。それを実感できるのは、皆に平等な機会を提供する政策と制度があって、かつ機能している場合だ。またさらに、結果が確かに機会の平等があることを証明している場合だ。「アメリカン・ドリーム」の概念は、まさにそのようなものだった。人々がアメリカン・ドリームを信じられるのは、実際に「襤褸から金持ちに（from rags to riches）」になる人たちがいるのがその証明だ。そのような、クレディブルな機会の平等が存在する必要条件は何だろう。わたくしは、次の二つの条件が重要だと思う。第一に、経済社会の成長と発展だ。変化のない社会はともすれば硬直的で、階

³ Thomas Piketty (translated by Arthur Goldhammer), *Capital in the Twenty-First Century*, 2014, Cambridge MA: The Belknap Press of Harvard University Press. (トマ・ピケッティ著、山形浩生、守岡桜、森本正史訳『21世紀の資本』、2014年、みすず書房) わたくしは、訳本のタイトルは『21世紀の資本論』がより適していると思う。

級やグループを超えて人々が「越境する」機会が少なくなる。そのような変化する社会においてこそ、階層の分断ではなく、「コンバージェンス（収斂）」が可能になる。第二の条件は、人が生まれた時の人生の競争条件をなるべく同じにするような社会になるよう政策や制度を通じて努力することだ。すなわち、下層階級や被差別階層のしがらみが、世代から世代へと引き継がれるのを防ぐように、階層間の壁を壊す努力が必要になる。

今日の先進国の中産階級あるいはブルーカラーの下層階級が、グローバリゼーション時代の成長と発展に取り残されているという危機感は、今に始まったことではない。アメリカでは、既にクリントン大統領の時代に、時の労働長官だったロバート・ライシュが、ウォール街の方を向いて財政緊縮ばかりに気をとられないで、成長の恩恵にあずからず実質賃金が停滞しているブルーカラーの利益になるような経済政策をとるべきだと、執拗に主張していた。⁴ 最近では、ピケティの『21世紀の資本』が出版されて間もなく、『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』で有名なロバート・パットナムが、『われらが子供たち：危機にある「アメリカの夢」』という著書の中で、アメリカ社会が貧困層と富裕層に二極分解していて、アメリカ社会の特長であった機会の平等が失われていると言っている。何人もその出自に関わりなく、金持ち階級や社会的エリート階級に加わるチャンスが与えられており、その機会の平等こそがアメリカン・ドリームで、それがアメリカ民主主義の礎なのに、それが失われては、アメリカの将来は暗い。親の世代の階層によって、家庭の形、住むところ、養育の方法に違いが生じ、その結果貧困層の子供と富裕層の子供の間に幼稚園前に知的・文化的・社会的な能力ギャップが生じることが、社会の階層化・分化の原因であるとする。単なる所得是正を超えて、より広範な、きめの細かい教育・保健分野における社会政策が必要になる。そうでなければ、アメリカン・ドリームを取り戻すことはできない。⁵

これから何処へ行くのか？

では、今後世界は何処へ行くのか、あるいは何処に向かって行けばよいのか。

1988年から2008年は、世界経済にとってまさに「黄金の20年」だった。この間にアジア金融危機があり、ソ連邦の崩壊があり、ことほど左様に世界経済を動揺させる事件があったにもかかわらず、だ。この間に、世界のグローバリゼーションに対するポピュリスト的な反対運動がなかったわけではない。世界の貿易システムを大きく改善しようという国際的な政策努力の結晶ともいえる、1999年のシアトルにおけるWTO会議は、

⁴ Robert Reich, *Locked in the Cabinet*, 1997, New York: Vintage Books. 彼が労働長官だったのは、1993年から1997年。この回想録の中で、彼は「豊かさと満足を満喫している階層と不安とシニシズムに苛まれている階層に、アメリカ社会が分化しつつある」と警告を発している（Introduction）。

⁵ Robert D. Putnam, *Our Kids: The American Dream in Crisis*, 2015, New York: Simon & Schuster. SRID ジャーナル第9号（2015-08）に、「もう一つの「格差論」」と題するこの本の書評がある。

激しいデモに圧倒された。わたくしはシアトルにはいなかったが、それ以来わたくしが出席した IMF/世銀総会でも、同じような激しいデモが繰り広げられ、総会出席者は警官の壁に隠れて、まるで囚われ人のようにコソコソと会議場を回っていた。デモの指導者たちが何を主張しているのかは、反エリート主義、反国際主義、反知性主義という情念と雰囲気以外には、何が問題なのか殆ど理解不能だった。⁶

世界経済が大きく変容してゆく中で、国の政策や制度の調整や改革が追い付いてゆかないのは事実だ。グローバリゼーションのルーザーに対して、所得再配分、教育、保健、貧困等々の面で改革の課題は残っていたし、また取り残された人々のアングストは十分理解できる。しかし、そのセンチメントを梃にして肥大化したポピュリスト政治は、将来の方向性を示せない。将来のビジョンや政策や制度改革の設計は、今日の複雑な社会ではどうしてもテクノクラートの政策技能を必要とする。しかし、反知性主義、反エリート主義、反テクノクラシーを標榜するポピュリスト政治家とその支持者は、経済社会運営のための、実現可能なオルタナティブ・モデルを提示することができない。せいぜいナショナリズムに訴えて、国内の既得権益保護を主張するような、国際的に見ればゼロサム・ゲーム的な政策を、人々をなかなんぞくルーザーグループに対して売り込もうとするだけだ。残念なことに、政策テクノクラートは、エリート層に属する。だから、反エリート主義や反知性主義のはびこるポピュリスト政治の場では無力だ。エリート層の中には、自分たちの既得の地位や自分たちの属するエスタブリッシュメントの秩序を守るのに汲々としている人たちもいる。それがよけいにポピュリスト政治を煽る。

わたくしは、世界の将来の軌跡を予測する能力など持ち合わせてはいない。しかし、どの方向に向かって行きたいかの、ぼんやりとした方向性は持っている。歴史がわれわれに教えてくれるのは、ポピュリスト政治は長期にわたる持続可能性を持っていないことだ。必ず挫折の時が来る。ポピュリズムが、実現可能なオルタナティブ・モデルを持っていない以上、それは当然のことだ。ただ、その挫折の時に、世界の社会経済の発展のブループリントが無ければならない。さもないと、挫折が混乱になり、世界大不況時のように世界の貿易制度や国際通貨制度が崩壊したり、途上国によく見られるようにクーデターに出口を求めることになる。

今は我慢の時で、ポピュリスト政治が挫折に見舞われたときに机の引き出しから取り出せるブループリント作りに精を出すのが良いのではなかろうか。では、どんなブループリントか。もちろん、ブループリント作りは大変な作業で、簡単にできるものではない。さらに、作ったブループリントに国民のコンセンサスを取り付けるのは、作るのと同様に難しい作業だ。ブループリントがどんなものになるかを提示するのは、わたくしには到底できない相談だ。しかし、これは超えてはならないという一線はいくつかある。

⁶ シアトル会議の様子を良く伝えているのは、Paul Blustein, *Misadventures of the Most Favored Nations: Clashing Egos, Inflated Ambitions, and the Great Shambles of the World Trade System*, 2009, New York: PublicAffairs. Chapter 4: "Clueless in Seattle".

第一の一線は、成長政策の重要性だ。経済成長は不必要だけでなく、むしろ有害だという人がある。「クタバレGDP」と叫ぶ人たちもいる。しかし、わたくしには、どのようにすれば成長なしに持続的に安定した経済が運営できるか理解できない。ゼロ成長は、安定的でなく、持続可能ではないのではなからうか。成長と発展を続ける経済の中でこそ、アメリカン・ドリームが再生できるのではなからうか。もちろん、アメリカだけでなく、世界各国でクレディブルなアメリカン・ドリームが—そうなる—と、アメリカン・ドリームではなく、「ワールド・ドリーム」と呼ぶべきだろうが—花咲くようになるためには、経済の成長と発展、特に構造変化とその中での人々の間の、また世代を超えての、流動性が重要だ。それがまた、今日人が「包摂的成長」と呼ぶものではなからうか。

7

第二に、グローバリゼーションの角を矯めて、飼いならす努力は必要かもしれないが、決して殺すような真似をしてはいけない。反グローバリゼーション、反国際主義は、必ずや自国のみの利益を追求する近隣窮乏化政策やある種の鎖国政策に結びつく。それが、狭隘なナショナリズムのセンチメント（「アメリカ・ファースト！」）に結びつく場合もある。しかし、そのような政策は、世界経済の成長と発展を阻害するだけだ。アメリカ、中国、インド—そして統一ヨーロッパは、グローバリゼーションなしに生きてゆけるかもしれない。しかし、それだけの規模と資源のないその他の大多数の国々は、成長のためにはグローバリゼーションを必要としている。先に紹介した「ミラノヴィッチの象」をもう一度思い起こしていただきたい。そのイメージにある象の肩の盛り上がりは、とうていグローバリゼーションなしには達成できなかっただろう。アジア諸国をはじめとする成長と貧困削減の記録は、明らかに「汝、グローバリゼーションを殺すなかれ」と教えている。

第3の超えてはいけない一線は、広範な、そしてきめの細かい社会政策・福祉政策だ。アメリカン・ドリームの再生の必要条件として、すべての人が機会の平等を享受できなければならない。そのためには、何人も、どの階層やグループに属するかに関わりなく、平等な教育と保健を与えられるべきだ。そして、そのためには、政府の役割を強化する必要がある。政府を強固なものにするためには、税制改革は不可欠だ。「小さい政府」や富裕層のための減税（「リーガン減税、トランプ減税？」）などは、論外だ。強い政府は、社会政策だけでなく、第一の条件である成長と発展のためにも必要不可欠だ。しっかりしたインフラなしには成長はなく、成長なくして社会政策の財源は生まれないからだ。

世界経済に冬の時代が訪れるようだ。もう既に冬の時代に入っているのかも知れない。

⁷ アジェモールとロビンソンは、包摂的成長とは何かを彼らの著書の中で論じている。

Daron Acemoglu and James A. Robinson, *Why Nations Fail: The Origins of Power, Prosperity, and Poverty*, 2012, New York: Crown Publishers. (鬼澤忍訳『国家はなぜ衰退するのか』、上下、2013年、早川書房)

この冬はなるべく温暖であって欲しい。また、「冬来たりなば、春遠からじ」という格言が本当であって欲しい・・・。